

1 懐き。
2025年6月28日(土)の伊勢湾台風は29日に長野県を襲った。幼年時代の最初の記憶で母の叫び声、雨音とともに長く聞こえていた。私は四歳だった。総二階の家は1920年に養蚕のために建てた。家業の養蚕は母が任された大事な仕事だったので、強大な自然の力が雨戸を倒して、蚕族を階段から雨水とともに押し流してきた時、母は父よりも先に廊が雨に濡れないように階段を駆け上がった。二人の兄は、雨戸を釘で打つ父の手助けをした。翌朝、外に出ると庭の二本の柿の木が倒されて土蔵の屋根瓦が吹き飛ばされていた。母と千曲川を見に行くと、橋が真ん中で折れていた。豪雨に家を壊されて流されてきた畳が、生簀のように、アカシアの木に刺さっていた。懐き。

2 自然とは、自我とは、どこから始まったのか。
ギリシャ語 physis はラテン語で natura と翻訳される。nature の語源は natura である。高橋巖『シュタイナー哲学入門』によるフィヒテの「自我は自分自身を定立する」は自我同一性で、(後の自己同一性と同じである)。

アイデンティティの確立である。ドイツ・ロマン派の自然認識については同書の252頁「われわれの周囲の日常の現実よりも、もっと高次の現実が疑いもなく存在している。(ゴットヒルフ・ハインリヒ・シュレーベル『回想録』28頁)「夢や共感や予感が、自然の壮大なものとみなすので、本質的な役割を演じている。つまり、動物が生じ、そして人間が生じるその壮大な過程のなかへ、たえず未来のほうからも、予感とか夢とか、共感作用とか憧れとかいう霊的な力が流れ込んでおり、その力に衝き動かされて自然そのもののいとなきがさまざまに進化発展を遂げていく。」(シュレーベル『自然科学の夜の側面』)ノヴァーリスはシュラーに学びシュラーはカントの思想を継承し発展させた。シュラーは自然科学が対象としている見えるものと、道徳的行為が主体が生きている見えないもの、の二つの世界をつなぐものとして「美とは目に見えないようになった自由である」という美的感受性を見出した。(2017年・加藤紫苑「講義」詩と哲学ノヴァーリスと産出的構想力)シュラーの「美的感受性」は、現代美術の世界では、現実とは、見えるものと、見えないものが同時に存在する。

3 human nature
人間の本性
樹下で木漏れ日が、
手指の甲に指点字を打つ。
(古くなるにつれて新しくなる)
というテロップが脳の中を流れる。
つきつぎと森のメッセージが、指に打たれる。
遠くの村の人間が家と共に土煙を上げて崩れてゆく。
腐葉土から芽生えて立ち上がる歴史が作られる。
human nature の姿が立ち上がる。
不屈の精神が草木とともに芽生える。

(註) 指点字とは盲者とコミュニケーションの手段の一つ。相手の手指の甲に自分の手指を載せ指で叩く事によって会話をする。

4 人間の歴史が正しかった例はない。
華原中国では、
須佐之男命の子孫の息子である大國主神が、
少名毘古那神と協力して禁厭医薬などの道を教え、
国作りを完成させたという。
人間を含めた自然全体の自由というものは、
草木と風の関係のようなものではなかったのか、
人間の歴史が正しかったなどという例はなく、
悪徳の時代が長かろうと短かろうと、
國王が女であらうとなかろうと本当のころは、
人間が存在することが悪なのだ。
そうしてふたたび、
空は、凍えて、
世界の輪郭が溶けて輝き出す：溶けるとは：：輝くことだったのだ：黄昏の風が指を掠めてゆく。
シュベルヴェイルの短編集を読み終えて、
手紙を書いた。愚かで残酷で、惨めで繊細な、
人間というものの未熟さが現わされていた。
夢のように、幻のように、わたしたち人間は、
文字の予言に翻弄されるだろう。
書物を開くと、物語を書いた人の息が、
読んでいる人の息を止める。

追善供養の塔婆の文字のように、
文字の上で、息根が止まる音がする。
その音は、幸福なリビングで、
シンビジウムの花びらが落下する音色と同じなのだ。

(註) 『日本書紀』第八段一書第六に「大己貴命と少彦名命は協力して天下を営んだ。この世の人々や家畜のために病の治療法を定め鳥獣や昆虫の害を攘う為に禁厭厭う禁厭法を定めた。」

並んだ椅子 久野雅幸

あなたが椅子に腰かけている隣で
わたしが椅子に腰かけている
同じ方向を向いて



一つの食卓を前に 二人で食事をとりながら
並んだ椅子に腰かけて
同じ方向を向いているのは
顔を見合わせていたくないからでも
むかし観た映画にならっているからでもなくて
食卓が六脚の椅子で囲むことのできる大きなもので
その部屋の中では窓際に長い方を寄せて置けずかなく
そのうえ
窓が わたしたちが顔を向けている その方向にしかなかったから

移り住んだアパートの
西向きの 窓からは
公園と その向こうに
姿がうつくしいことで知られる
なだらかな山の姿を見ることができた

並んだ椅子に腰かけて
あなたがわたしが同じ方向を向いている
たぶんそのことがわたしを少し不安にしたのだと思う
こんなふうに
並んで同じ方向を向いていると
なんだか
並んで同じ方向を向いている
二本のひまわりの花みたく
いつのまにか
あなたが本当にひまわりの花になってしまっていて
わたしは隣でぼんやりと外を見ているしかない
そんなことが起きてしまうのではないかと思われた
あなたのほうが早く風を迎え入れてしまったんだな
そんなふうに思っ
さつきまで
並んで食事をしていたあなたの前に
まだ水の入っているコップを置き直したりするだろうか
どうしようもない せつない気持ちになっ

迎え入れることと見送ることの間に
駆けまわることのできる野原が広がるんだ
間をとまなわな時間などないのだから
時のうえに立ち止まっても時間が来れば動き出す
一日がどんなに太陽に似ていても
一日という時間は見送ることしかできないわけじゃない
食器を二人で流しに運び
洗って かたづけ
その間
並んだ椅子は 並んだままで
同じ方向を向いている



いつやんだのか 生野 毅

あしものが すく われる その あとさき なら
どろと こけにまみれた ほんとうの あしを
すくいあげな ければ また もつ れてしまっ
から
ほんとうの あしが つぎつぎと ちよ くり つし
てゆく その あとさき なら あしものが すく
われる ことは たぶん もうない から とに
もか くにも ある いて ゆける おれ なら

バス(3) 池田 康

外が変な色に発光している
とても変な色だ
まがまがしくもある奇妙な色
遠くの方で兵隊が動いている
大砲の音 爆発の火花 黒い煙
どこどここの戦争なのだ
運転手はなににも教えてくれない
このバスは安全という建前で走っているが
どうだか
弾が一発飛んでくればあつけなく吹っ飛びかねない
と危ぶむ間もなく
被弾した道路のくぼみに前輪がつっこんで
首にくる衝撃
はげしく揺れた

バスガイドがなにかしゃべっている
この地域の歴史についてらしい
若い女 というよりも少女だ
バスガイドはうたうたうたうたにしゃべっている
その言葉は外国語なのかよくわからない
僕はバスガイドの衣装を見る
その表情を
その目を
この少女こそが目的地 だしたら
バスは永遠に行き着くことができない
あるいはすでに行き着いてしまっ
うとうとして
再度目覚めたら
少女は消えていた
zzz

昔々あるところ……
——と少女ガイドが話している
皇太子が暗殺されました
そして大きな戦争が始まりました
その戦争は今でも続いています
王家も宮殿もうなくなつてしまいました
敵の皇帝も
敵の敵の大統領も
敵の敵の敵の将軍も死んでしまいました
あれが彼らの墓です
——とバスガイドが瓦礫の山を指差す

炎3篇 酒見直子

果実
燃える指先
育てる者は言う
心は手のひらにある
指から放たれる紅い炎は
リングに宿り
時を超えて
少年のいのちを照らす
少年
鳥のさえずりが
鳥のものでなくて
春のものであるように
言葉が
人のものではないように
少年の瞳の炎は
何の現れ
決意
光る闇をかえた少年
そこに小鳥のさえずりが
沈んでいる
まもなく
音を乗せて飛び立つのだろう
落とした言葉は
青い炎として芽吹くのだろう



バスがいけない方角に行く
そっちは行つてはいけない
そこは何某の恥部だ
恥ずかしい部屋だ
一番隠しておきたいあれなんだ
いけない大声を上げてしまう
気が狂ってしまう
バスよ 勘弁してくれ
そこは何某の弁明不可能な大罪の犯行現場なのだ
死んだ蛙が鳴く
死んだ母が泣く
ああ！

変な夢が頭痛を残して去ってゆく
頭が痛い これは苦痛の中でももっとも特殊な
一番嫌な苦痛 自家中毒の拷問だ
頭痛という荷の重さを持って余して
いぶかしむ
あの夢はなんだったのか どこへ行ったのか
あの最悪の夢を追いかけろ！
夢を追いかける——響きのいい表現だ
最高の逃げ口上だ
zzz

滅亡まであと一分
バスガイドの少女が突然言う
滅亡へ向かって走るバス
滅亡から逃げるバス
滅亡を乗せるバス
滅亡を超えるバス
方舟
に乗り込んだつもりはないのだが
滅亡まであと五十九秒
と少女は言う
シートベルトはない
zzz (つづへ)